

「親子のふれあい」意識の高揚をはかるために

学年部会行事「親子のつどい」を通して

足利市立名草小学校 多田 一雄

1. はじめに

朝日新聞日曜版に連載されている「原田泰治の世界」は、私たちの心をなごませてくれる。あのふるさとの詩情をもとに描かれた風景とともに、登場する人物のなごやかな雰囲気の中に、心温まる人々のふれあいが描かれているのが印象的だ。

昭和30年代以降の高度成長期以後、人間同士の心のふれあいが失われつつある今日、私たちは「ふれあい」というものの大切さを、人間の教育という観点から問い直してみる必要があるように思えた。

昭和58年9月に総理府から発表された「国民生活意識調査」の中でも、「家族だんらん」の薄れていることが取り上げられている。家族の共同生活という営みの上に私たちは育ってきた。そこで多くのことを学んできたのが事実である。家の手伝いはもちろんのこと、父や母、祖父母との語らいの中で地域社会での生き方を学び、地域の人々とのふれあいまでも身につけていったものである。

しかし、今日において先に示したような現状から多くの社会問題が起こっている。家庭内暴力を始めとした青少年の非行事件、命の重みを認識しない児童、それは、「ふれあい」の欠如ばかりが原因とは言いきれないが、家族の連帯感・地域社会の連帯感の意識が薄いことに起因する事件もかなりあるのではないだろうか。

子供たちは「ふれあい」を拒否しているのではない。大人である私たちの方が、忙しさにつられて「ふれあい」を拒否している場面が多いように思う。

そのような考えから、まず親子のふれあいの大切さを認識してもらおうべく、学年部会行事の中に組み入れ試みることにした。

つたない試みではあるが、市教育目標との関連を考慮し、本年度実施した内容「ふれあう」ことの大切さを述べてみたい。

2 教育目標の具現化をめざして（足利市の教育目標より引用）

教育目標番号 38

家族が互いに尊重し合い、明るい家庭生活ができるようになりましょう。

(1) 目標達成の時期

壮年期	～	高齢期
-----	---	-----

（児童の両親を対象とするために）

(2) 実施計画

1. 家族の話し合いの場を増やすことができる。

2. 心の通い合う言葉づかいをすることができる。
3. 相手の気持ちを理解し、感謝の心をもつことができる。
4. 家族の各々の立場にたって、適切な行動をとることができる。

(3) 具 体 策

- 家庭において、豊かな経験の積極的活用
- 家族ぐるみのレクリエーション活動や仕事の積極的実施
- オアシス運動の推進

(4) 目標達成の場とそのかかわり（教育機能連関）

- 家庭では、家族団らんや仕事をする場をつくるように努める。
- 学校では、明るい家庭を築くための指導を行う。
- 公民館では、明るい家庭を築くための各種学級の拡充を図る。

◎ 家庭を中核として、学校や社会教育機関との連携を図りながら、豊かな人間関係が築けるような態度を育てる。

以上のように足利市教育目標では、「明るい家庭づくり」に重点をおいているが、その具体策の現状として、社会教育では、公民館での父親・母親学級、学校教育では学年部会行事などを通してこの内容にせまる活動が挙げられる。また「広報あしかがみ」などを通じた啓発も行われている。

従来、この種の活動がその対象を成人においていたようだが、今日は、学年部会行事として親子一緒活動を試みることにした。

計 画

目的 親子のふれあい活動を通し、一緒に考え、共に明るい家庭を築こうとする態度を育てる。

- | | |
|------------------|-----------------------|
| (1) 父と子のレクリエーション | (2) 親子水泳教室 |
| (3) 親子で考える同和問題 | (4) 親子の夕べ・親子オリエンテーリング |
| (5) 祖父母といっしょに | (6) 親子たこづくり |
| (7) ありがとう家庭のみなさん | |

子どもたちの側に立った教育目標との関連

- | | | |
|----|----|--------------------------|
| 番号 | 39 | 家庭で行う行事に積極的に参加しましょう。 |
| 〃 | 41 | 人格の基本となる望ましい性格を身につけましょう。 |

3. 実 践 例

(1) 「父と子のレクリエーション」

目 的 ふだんの生活において父と子でふれあう時間が少なくなりつつある中で、ふれあう時間を持ち、その時間をふだんの生活の中につくることの大切さに気づかせる。

時 間 昭和58年7月27日 夜7時から9時まで

場 所 名草小学校講堂（父30名、母1名、児童34名）

内 容 父と子のレクリエーション

（自己紹介、グループづくりとグループ間のゲーム）

結 果

父と子で過ごす時間を持つということが、事前調査で1日平均およそ10分程度であった。最高でも1時間くらいというのが1名のみであった。もっとも同じ部屋でテレビを見る時間などは除いたものである。

テレビのない時代、子供達は友達との遊びとともに家族だんらんの時を過ごすのが多かった。また家の仕事も分担し、家族の一員としての自覚も大きかった。

しかし、近年職を持つ親の多くがサラリーマン化し、両親が「家庭は休養を取る場」というイメージを持ち、子供と一緒にいても対話はなく、テレビを見ながら過ごす時間が日常あたりまえのようにになっている。

そこで、そのような家庭の問題を意識させ、ふれあうことの大切さを深く見つけ直してもらい、一緒になって子供を育てる意識の高揚を考えてほしいと思った。

親と子で手をつなぎ遊ぶことなんて何年ぶりかと言ってくれた親がいた。何よりもこの地域の中で今日まで知らない父親同士のいたことに驚きはしたものの、互いに心をひとつにし、親同士が知りあえたこともひとつの収穫だったように思う。これこそ地域の教育力につながる第一歩ではないだろうか。

また、学校という場を利用したが、仕事でなかなか来ることのできない学校も参観してもらい、学校教育の一端なりとも理解していただければと願わずにはいられなかった。

感 想

- ① ふだん子供達と顔を合わせるのも少ないし、話をするのも母親に比べてあまりありません。こうしたなかで、父と子で少々の時間ではありますが、ゲームをして楽しいひとときを過ごすことが子供達の思い出に残るものだと思います。
- ② ふだん父と子の対話がないので、これが良いきっかけになった。
- ③ レクリエーションをやりながら父と子で意見の交換ができるようになった。

(2) 「親子旅行・親子水泳教室」

目 的 親子で水泳や水遊びをすることにより、互いにささえあう人間関係と親子のふれあいを深める。

時 昭和58年8月24日 朝7時30分から夕5時30分まで
場 所 真岡市万人プール(母28名, 児童34名)
内 容 バスの中でのゲーム, 手を取って泳ごう, 水遊び
結 果 あいにくの天気で午前中プールで水遊びをする程度になってしまったが, スクールバスの車中で楽しいゲームなどに興ずることができた。

感 想

- ① 親子で楽しめるせっかくの機会だったのに, お母さんたちもプールに入れたらもっと良かったと思う。
- ② プールでは雨に降られ残念だったが, 益子焼を見学し見事なできばえに感心する。なかなか出かける機会がないのでこれからも続けたい。
- ③ 親子旅行の機会をつくりたいと思う。

(3) 「みんなで考える同和問題」

目 的 小学校で行う同和教育について, 資料「みんなの幸せを求めて」をもとに映画「夜明けをめざして」の観賞と話し合い。

結 果

私が赴任して4年目の時, 結婚問題が破談になった話を聞いたことがあった。相手方が部落の出身ということを知った両親, 祖父母が反対したためである。

このことを思うと, 学校で正しい認識を与えても, それがほんとうに児童の考え方・生き方となるか否かは, 家庭の考え方にかかると言っても過言ではない。

将来, 児童がいつどんな場面で遭遇するかわからない問題であり, 家族と共に正しい認識を育てることが, その問題解決のひとつの方法のように思う。

小学校で行う同和教育について, 「みんなの幸せを求めて」をもとに説明したが授業参観とあわせて行えたことが, かなり意識の改善に役立ったように思う。

感 想

- ① 今まで同和問題というのは, ただみんなとなかよくしていれば良いぐらいにしか考えていませんでしたけれど, あの話や映画を通して, もっと深いものなのだということがわかりました。子供のためにも良かったと思います。
- ② あらためて差別というものを考えさせられました。封建時代の落とし子とでも思える習慣が今だに根強く残っていることを感じました。
- ③ 親と子供の考え方に大きな差があると思う。しかし少しでも子供の考えに近づきたいと思わずにいられなかった。
- ④ 私達がならった同和問題を思い出し, あらためて考えさせられました。
- ⑤ 同和問題は本当に難しいと思います。その難しさを子供達と親に同時に理解させるのは容易でないことだと思います。自分は仕事でこの問題に関連していますので多少物足りない面もありましたが, 一般的にはこの程度でしょう。

現在、明るく、くったくのない心を持っている子供達が、同和問題のみでなく差別をしない、許さない気持ちを持った人間に育ててほしいと思う。

以上のような感想がアンケートに書かれていたが、親の本音というものがなかなか聞くことができなかつたのが残念だった。児童の意見や感想を通して何らかの形で同和問題に対する意識の高揚がはかれたように思う。

幸にして、足利市ではこの時期地区ごとに懇談会を行っている。そのような社会教育ともっと力を合わせ進めることがより効果的であるように思えた。

(4) 「セミナーハウスの夕べと親子オリエンテーリング」

目的 日頃から世話になる両親や家族を招待し、感謝の念を培うとともに、家族で過ごす休日の楽しさや友とのふれあいを高める。

時 昭和58年11月26日から27日 1泊2日

場所 足利市セミナーハウス(父母42名、家族6名、児童34名)

内容 夕食会

キャンドルサービスと親子レクリエーション

親子オリエンテーリング(第2日)

結果

学級会で夕食に「かつ丼」をごちそうしようということになった。自分たちで買い物や注文をし、2時間の準備中はてんやわんやの大騒動のようであった。こげついてしまったり、玉ねぎが生のままになったりしたが、親もがまんして食べてくれていたようだが、子供達は得意げであった。

また夜のキャンドルサービスはいっしょになって体を動かし、ゲームや歌に興じていた。ほのかに親子のふれあいを感じるひとこまであった。

ふだん何気なく生きている子供達だが、たくさんの人たちによって生かされていることを知り、特に家族の人たちからは、限りない感謝の念をいただくほどの恩恵を受けていることに気づかせたいとも思えた。

2日目は親子オリエンテーリングを行った。

2人1組となり、セミナーハウスオリエンテーリングコースを使って行ったが、ゴールめざして親子で走ったり、親のつかれを気づかたりする姿に親子のつながりの強さを感じた。

欲を言えば宿泊体験を通し、人間の連帯意識の大切さにもふれてみたかった。

感想

① 家族で参加できとても楽しかった行事でした。

男の子でも食事を作ったり、ならべたりする姿をみて、いつも見ていない子供の一面を見たような気がしました。

- ② 夜の行事に参加して久しぶりに童心にかえった気がしました。ゲームも楽しかったが、子供達の作ってくれた夕食の味が格別でした。親子共に生涯忘れられない思い出のひとつとなるでしょう。
- ③ 子供達だけの料理を一生懸命に作ってくれたこと、親子でそれを食べ、夜のキャンドルサービス、オリエンテーリングの親子一生懸命走ったことなど、良い思い出となりました。
- ④ 家庭では何もできないと思っていたことが、親がいなくてもできるんだということを親子がそれぞれ感じ、そして満足したように思いました。これが今後の生活に少しでも役立ってくれればと願うひとりです。
- ⑤ 今でも一生懸命夕食を作っている子供達の姿が目には浮かびます。家では何もしないでいた子供達がカレーやサラダを作ってくれました。

(5) 祖父母といっしょに

目的 祖父母のみなさんに現在の学校の様子を知っていただき、児童の望ましい成長について考えてもらい祖父母とのふれあいを深める。

時 昭和58年12月20日 午前10時から午後1時

場所 名草小学校6年教室(祖父母15名, 児童33名)

内容 授業参観 社会科「土農工商」(学校で行う同和教育)
グループワーク
給食試食会

結果

孫が毎日通う学校ではどんな学習が行われているのか祖父母にとって興味深いことではないだろうか。

授業参観では今の小学校でどんなやり方で、どんな内容の学習が行われているのか一般的な方法で試みたが、思い切ってその内容に同和問題に関する社会科直接教材「土農工商」の身分制度の学習を行った。農村地域では、かなり祖父母の考えが家庭の考え方の中心となるように思われ、児童の正しい認識をくずさないためにもこの授業参観が必要だと思えた。今後において同和問題について正しい認識が今まで以上に深まることを願わずにいられない。

グループワークでは、始めゲートボールを予定していたが、天候不良のため、室内でのゲームを行った。一緒になって考え、語り合う中により一層の連帯感を深めてもらいたいと思った。孫の友達をより多く知ることにより、みんなで育てる地域の子供という意識も高めてほしかった。

また昼食会では、給食のありがたさ、量の多さにびっくりしながら子供達と食事をとっていた。

そのような語らいの場をぜひとも家庭の中で習慣化していってくれたらと思えた。

感想

- ① 近所に連れがいなかったせいか、最初は行くのをしぶりましたが、楽しい1日が過ごせました。孫共々こんな日は初めてです。
- ② 次の世代を担う孫達と共に同和問題の勉強ができ、とてもうれしく思いました。
同じ人間として生まれながら差別され、かけがえのない人生航路をくやし涙で送り終っていった方々……、今なお生活して行く方々の気持ちを考える時、せめて大正・昭和の初期に同和問題解決の道はなかったかと思うと残念でなりません。
- ③ 学校へ行ったおばあちゃん、おじいちゃんの様子を家中の人に話を聞かせて、給食を食べるのにこうだったとか、みんなと大笑いしました。
(親子たこづくり、みなさんありがとうございます、2月、3月に予定しています。)

4. アンケートより

みなさんの家庭では、この行事以後「ふれあう時間」はどうになりましたか。

ふえた 25 へった 0 かわらない 9

どんなことで具体的にあらわれていますか。

- 大そうじをいっしょにやる。 (21名)
- たよりがいができた。 (3名)
- 差別問題について真剣に考えた。 (7名)
- もちつき (23名)
- 親子旅行 (6名)
- 食事の時テレビを見なくなった。 (25名)
- 雪合戦(家族みんなで) (3名)
- 道路の雪かたづけ (2名)
- 元旦に親子で山のぼり(初日の出を見に) (1名)
- 農家の仕事の手伝い (8名)
- 家族でゲーム (5名)
- 毎週月曜日はテレビを見ない日と決め、家族だんらんの日とした。(1名)
- その他 以上クラス34名中回収34名(100%)

5. 反省と今後の方策について

—— 地域の教育力を高めるために ——

親子がそのふれあいを深め、身につけた連帯感がほんとうに社会の場で生かされるかどうかは、今日の子供たちをとりまく社会環境の影響を多分に受けるものである。この点についての実践が、今日は少なかったように思う。

子供たちの住む地域の人々との交流を深め、地域の教育力を高め、教育風土を創りあげていくことが必要である。なぜならば、ある正しい認識を家族みんなが持っていても、それが社会の中で生き受け入れられ、反社会的行動は地域ぐるみで排除されるような地域の人々の目が育たなければ片手落ちになってしまうからである。

そのために、学校・家庭・地域社会がより一層の協力態度を強め、地域の教育力を高めることが不可欠な要素なのである。

① 学校児童・生徒会、地域子供会・育成会、自治会との連携

- あいさつ運動を進め、その推進にあたり、地域の人々の理解と協力を求め、地域ぐるみで行う。
- 善行児童の表彰など、社会的模範となる児童・生徒を地域ぐるみで推選し発表していく。
- クリーン運動などを通じ、地域の人たちとともに我が郷土への愛情を育てる。

② 学校・公民館を「ふれあいの場」として活用する。

公民館の多くが、地域の人たちに出張所的な意味でとらえられているものが多く、真の意味での住民参加による公民館づくりは、まだ数少なく、基幹公民館で行われているに過ぎないようである。

公民館が地域づくりのための施設であるという立場、学校が現に子供たちの教育を行っている立場を踏まえ、子供たちと地域の人たちとの交わりといった世代間交流の機会をつくり出す場になるよう更に積極的な働きかけを期待する。

学校や公民館の人づくりの目的を活用し、地域に住む人々に積極的にはたらきかけ、みんなで作る地域社会をめざして活動することも、地域の人々のふれあいを深める上で必要なことのように思う。

6. 終りに

足利に久しぶりの大雪が降った。二度目の大雪の日曜日学校の様子を見にでかけて行くと、ある光景に出合った。家族みんなで大通りの雪かきをしているのである。降り積もる雪をみんなでかたづけているその姿に、「ふれあう家庭」の姿が浮かんできた。

わずか数回であるが、少しなりとも「ふれあう」ことの大切さを家庭の人たちが考えてくれたらと思ひ、部会行事として続けてきた。そして子供達と、家族の人といっしょにひざを交え語り合い遊ぶことができたことが何よりもの収穫だったように思う。その中で子供の心を理解し、次代の世を担う子供達にみずからの生き方を示していく意識も一段と強くなった。これからも家庭の一員として、社会の一員として育つ子供の教育を、学校、家庭、地域社会三者連携のもとに具体的に進める方策を追求していきたい。

それには、とかく学校にこもりがちな私たちの意識を広め、地域社会の人たちと共に考える

ことが今より以上に必要ではないだろうか。

まだ点としての活動から脱し切れぬ実践であったが、学校・地域ぐるみの実践になるよう願うものである。

〔参考文献〕

児童心理 (金子書房) 昭和54年5月号, 昭和59年2月号

月刊社会教育 昭和55年11月号, 昭和57年4月号

月刊公民館 昭和58年1月号

親と子の四季 広池出版 神保信一著

国民生活意識調査 昭和58年9月発表 総理府

評

現在ほど家族だんらの機会の希薄のときはないとよく言われています。親子のふれあいを通して明るい家庭をつくるために、親子が共に話し合い、考えたり、汗を流すなどの場を学年行事の中に計画的・意図的に設けていることは、素晴らしいことだと思います。

特に、学校と家庭との連絡を密にして、数々の学習体験の場を開発し、子供たちと親との一層の親近感をもたせる機会を提供しています。その中で親への尊敬の念が培われていくものです。

このような親子のふれあいを深める学年行事としての取り組みについて着目したい。今後さらに子供たちの発達段階に即しての親と子のふれあいの場を設け、さらに研究実践の深まりと拡大に期待しております。